

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號五第 卷十四第

行發日一月五年十和昭

論 叢

傭人税に就きて 法學博士 神戸正雄

利子の社會的説明 文學博士 高田保馬

第三史觀の可能性 文學博士 米田庄太郎

時 論

日支貿易の促進について 經濟學博士 谷口吉彦

研 究

ロツシヤに於ける國民經濟の意義 經濟學士 白杉庄一郎

百貨店出張販賣存續の條件 經濟學士 堀 新一

株仲間の信用保持機能 經濟學士 宮本又次

說 苑

中島治平と山口藩の洋式工業 經濟學士 堀江保藏

カルテルと景氣變動 經濟學士 田杉 競

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁 轉 載)

百貨店出張販賣存續の條件 (上)

——百貨店統制の基礎問題——

堀 新 一

一、存續條件決定の根本的見地(一)經濟政策的見地(二)社會政策的見地(三)社會機能の見地

二、百貨店出張販賣の社會的機能(一)地方的需要の充足性(二)季節的需要の充足性

三、百貨店出張販賣に對する統制形態(一)百貨店出張販賣の放任論と全廢論(以上本號以下次號)(二)百貨店出張販賣制限論(三)商品種類制限論の長所

四、結論

百貨店の出張販賣は百貨店商業組合の規約に於ても原則として行はれざる事となつた。元來百貨店の出張販賣に關しては、殆んど學問的研究の見べきもの無く、稀に之を口にする者も、多くは、單なる常識論に過ぎず、單純に、之が全廢を以て社會的に好ましき所と考へた。然し私は曾て述べた如く、百貨店出張販賣の全廢を以て必ずしも社會的に望ましき所とは信じてない。蓋し百貨店の出張販賣はその短所と共に、又極めて多くの社會的長所を持つ存在であるからである。されば問題は如何にしてこれが短所を抑へ、その長所を發揮せしむべきかにあるわけである。私の本論の目的は百貨店出張販賣は、如何なる範圍に於てその存續を許容せらるべきやに就いての研究にして、以て百貨店統制の基礎的考察に資せんとするにある。

一、存續條件決定の根本的見地

1) 拙稿「百貨店の出張販賣の社會的機能」(昭和三十九年二月號) 經營研究

2) 拙稿「百貨店の出張販賣の社會的機能」(昭和三十九年六月號) 都市問題

3) 拙稿「百貨店の出張販賣の社會的機能」(昭和三十九年六月號) 經營經濟研究

我等が一般に百貨店問題等を取扱ふに際し、第一に注意すべき事は、論者が如何なる根本的見地より該問題を考察しつゝあるかを先づ決定する必要がある事である。

(一)、**經濟政策的見地と社會政策的見地** 普通論議さるゝ所を見るに、經濟政策乃至は生産政策的見地よりの考察と社會政策的見地よりの考察とも云ふべきものに分ち考へる事が出来る。前の見解は國家又は社會の經濟的發展を中心として考へるのであつて、この見地に立つ限り、大資本の小資本壓迫の如きは現在社會に於いては必然的なものであり、寧ろその助長速進をこそ望め、これを抑制阻止するが如きは經濟的發展を停滯せしめ、社會的能率を減損する結果となる。よろしく自由競争による自然淘汰を實現せしめ、國民生活の活氣と向上を望むべしとするのであるが、成程これは經濟主義に合致し、經濟的能率を高むる結果となるかも知れない。然しこれが果して社會全般の福祉を齎す結果となるであらうか。若しそれが如何に經濟的能率の増進とならうとも社會全般の福祉とならざる限り、決して採るべきではない。こゝに社會政策的見地の生れる根據がある。この見地に立つ者は中産階級の存在を以て、階級闘争の緩衝地帯なりとなし、若しこれ無かりせば全社會は二大階級の對立となり、階級闘争は益々激化し、社會全般の福祉は害せらるべく、結局、堅實なる社會の發展は期待出来ないとす。然しこの見地が住々不合理の擁護となり、社會進歩阻害の結果を齎す事も忘れてはならない。

(二)、**社會機能の見地** この見地に於ては一の社會的存在はその機能を合理的に發揮しつゝある間

はその存續を要求せらるべきであるとし、例へば小賣店が合理的な機能を發揮しつゝある面に於てこれを壓迫して百貨店の繁榮を助長せんとするが如き、或は百貨店が合理的な機能を發揮しつゝある面に於て不合理且非經濟的な小賣店の存續を擁護せんとするが如きは共に不可なりとする。私は多くのわが國の學者と共にこの根本的見地を採る。蓋しこの見地は先の經濟政策的見地社會政策的見地にも矛盾せざる否兩者を止揚せる一見地とも考へる事が出来るが、この見地に立つ者と雖も客觀的情勢に應じてその機能が刻々と或は廣められ或は狭められつゝある事を忘れてはならない。私はこの場合、考察の便誼上、概念的に、(1)本質的機能(2)現實的機能(3)附隨的機能に分ちて考へる事を適當なりと思ふ。こゝに本質的機能とは、例へば百貨店が *Shopping Goods* 連鎖店が *Convenience Goods* にその特徴を見出すと云はれて居る如く、一配給組織に於ける各種の配給形態の分擔する特徴的機能に著目したものであり、一の理念形態とも云ふべきものにして勿論これは現實に一社會乃至は一地方に於て各種の配給形態の分擔する機能(現實的機能)そのものとは完全に一致するものではない。云はゞ現實に各社會各地方に於て分擔されつゝある共通の特徴的機能を抽象したもので、例へば連鎖店の機能は斯々であり、通信販賣の機能は斯々であると云つても、現實には、連鎖店通信販賣の未發達な地方に於ては、必ずしも合理的ではないにせよ他の形態により分擔されねばならず、中間商人の不必要を叫んでその機能の消滅せる事を説いても、尙現在では、その存續を必要とする地方もある事は否定出来ないわけで、本質的機能必ずし

2) 谷口吉彦氏 前掲論文 Otte Kytzinger, Warenhaus und Spezialgeschäft
(Probleme des Warenhaus S. 105-112)
拙稿 百貨店と専門店(經濟論叢昭和八年八月號)

も現實的機能と一致するものではない。然し例令それは相對的なものではあるにせよ、一應次の如く云ふ事が出来る。我等はその本質的機能に於ては比較的固定性を見出すのであるが、現實的機能は客觀的情勢に應じて或は狭められ或は廣められつゝあると。こゝに附隨的機能とは、例へば小賣商人は一般に配給組織に於ける小賣分野の分擔者であるが、他面彼等をその社會的地位より見れば、一社會の中産階級として、社會の中堅を構成し、所謂階級闘争の緩衝地帯を構成して居り、これは小賣商業の特殊的意義より必然的に來るものであつて、¹⁾かく配給上に於ける本質的乃至は現實的機能に附隨して、間接的に一社會に於て果しつゝある機能を指すのである。

然らばかく各配給形態の機能を三つに分ちて考へる事は果して如何なる意義をもつものであるか。私はそこに大きな小賣店對策上の根據又は方向を見出す事が出来ると思ふのである。私の主張はこうである。我等の對策の根據は一應は各配給形態の現實的機能を認めると共に、他面これを可及的にその本質的機能に近寄らしむる點に存在するのであると。²⁾小賣店の未發達な地方で、小賣店の機能までも百貨店や産業組合が代行してゐる地方では、速に小賣店の發達を助長して、その機能を彼等に奪ひ返さしめねばならぬ。或は一社會の社會制度法律關係が各配給形態の合理的機能發揮の阻害となつてゐるなれば、それを取除かねばならない。かく考へる時に、私は從來保守退嬰的とか受動的とか非難された社會機能説が、初めて、活々とした實踐的根據をもつた能動的な學説として成立つ事が出来ると思ふ。

1) 河津暹著 中小農工商問題 一〇二頁
2) 拙稿 植民地都市に於ける百貨店の近情

さて私はかゝる見地に立つて百貨店出張販賣の問題を考究しようとするのであるが、この場合必然問題となるのは、(イ)百貨店出張販賣の社會的機能は果して存在するか、若し存在するとせば如何なる部面に見出されるか、今日の百貨店の出張販賣は他の配給形態(特に小賣店)の機能を侵害しつつあるか。(ロ)如何にして百貨店出張販賣に合理的機能を發揮せしむると共に他の小賣形態の機能の侵蝕を防止すべきかの諸點になければならない。以下これ等の問題に就いて考察する事にしよう。

二、百貨店出張販賣の社會的機能

さて我等の見地より百貨店問題を考究せんとする限り、一の小賣形態の合理的に發揮すべき機能が那邊にあるかを研究する事は極めて必要な事と云はねばならぬ。然らば私は百貨店出張販賣の社會的機能を如何なる點に求めんとするか。この點に關する所見は曾て私も述べておいた所であるが、今論理進展の必要上こゝに簡単に考察せんに、要するに私は百貨店出張販賣の本質的な社會機能を地方の季節的需要の充實にありと考へるのである。こゝに二つの標識が問題となる。

(一) **地方的需要の充足性** 百貨店の出張販賣は地方の需要を充實するものである。勿論今日出張販賣の狀況を見るに、市内並に郊外出張も屢々行はれて居るが、私を以てせば斯の如きは出張販賣の本質的機能に屬するものではない。蓋し百貨店は顧客を自店に吸引することにその特徴を持つ

ものであつて、百貨店所在の市内並に近郊に於ては寧ろ顧客が百貨店に赴く事ができ、敢て百貨店の出張を待たずとも十分にその需要を充す事ができるのである。さればかゝる郊外及び市内出張に於ては、その取扱品も Shopping Goods よりも寧ろ食糧品・日用品・雜貨類等が主であるが、かゝる商品なれば敢て百貨店の出張を待つ必要なく地方小賣店にても十分その需要を充し得る所である。百貨店出張販賣が地方の需要を充實するものである事は又出張販賣發展の原因を一顧すれば容易に了解される所であつて、これを經營者の側より見れば、今日中小都市まで定住店輔を設ける事はその設立維持の經費に到底耐えざる所であるが、一方地方消費者の側より見ればその漸次的資本主義化とともに百貨店への憧憬の増大となるわけで、かゝる支分店設置の非合理性と消費者の欲求の増大の間に於ける隔離を克服するために生れたのが今日の百貨店出張販賣なりと云ふ事が出来る。されば百貨店の出張販賣は地方に於てこそ始めてその合理的機能を發揮し得る所にして、かの市内並に郊外出張の如きは全てその本質的機能に屬せないと云はねばならぬ

(二) 季節的需要的充足性 百貨店の出張販賣は地方の定期的需要特に季節的需要的を充實するものである。ヒルシュ教授は百貨店の國民經濟的意義を論じて、その季節的需要的の調節性をあげ、キツチンゲル氏はこれに對し小賣店の社會機能を消費者に近接して日常需要偶發的的需要を充し得る點に求めてゐる。私は百貨店出張販賣の配給組織の分業上に於ける機能を地方の季節的需要的の充實にありと考へる。これは百貨店の持つ特性と出張販賣の持つ特性より來る。出張販賣は短期一時

- 2) 上田貞次郎氏 商工經營 七三頁
 3) J. Hirsch, Die Bedeutung des Warenhaus in der Volkswirtschaft (Probleme des Warenhauses S. 59)
 4) Otto Kytzinger, Warenhaus und Spezialgeschäft

的なものにして到底日常需要や不定期的需要は合理的に充足する事は出来ない。かゝる機能はキツチンゲル氏も云ふ如く、日常消費者に近接する小賣店により最もよく發揮されるものである。然るに一方百貨店出張販賣の最も得意とする定期的需要特に季節的需要の如きは需要の變動より來る業務の繁閑のため到底小賣専門店では合理的に充す事は出来ない。かゝる業務は百貨店が之を行ふ時は、百貨店は凡百の商品を取扱ひヒルシユ教授も力説して居る如くその季節的業務の繁閑調節機能は十分之を備へて居る關係上、よく合理的に充實する事が出来るのである。一面之を消費者の側より見ても、日常需要や偶發的需要を充すためには、出張販賣では短期一時的な關係上、甚だ不便であり、小賣店の如き定住店輔の存在が要求されるが、季節的需要の如きにありては、敢て定住店輔なくとも百貨店の出張の如きで充さるゝに殆んど不便を感じないのである。今日百貨店の出張販賣がその取扱商品の各種商品に亘る結果、特にその配給政策等のため、日用品や食糧品の如きを取扱ふ小賣店迄も疲弊没落の淵にあるは、社會的に甚だ寒心すべきことであつて私を以てせば、斯の如きは、百貨店出張販賣の本質的機能を發揮する所以ではないと思ふ。

百貨店出張販賣の本質的な社會機能は以上の如くである。そして私の立場に立つ限り、この百貨店出張販賣の社會機能を如何にして發揚すべきかゞ問題である。小賣店の行ふべき機能を百貨店が行つてゐるなれば小賣店を援助してその機能を奪還せしめねばならない。百貨店の合理的に行ふべき機能を過剰な中産階級政策のため小賣店その他の配給形態が行つて居る地方なれば、か

る障害は却つて取除かねばならない。以下私は然らば如何にして百貨店出張販賣並に地方小賣店の機能を合理的に發揮せしむべきかの問題に就いて一考し、從來の百貨店出張販賣對策と考へられしものに就いて批判して見たい。

三、百貨店の出張販賣に對する統制形態

(一) 百貨店出張販賣の放任論と全廢論

A、放任論 出張販賣に對する干涉を否定するものは、主として、經濟政策的見地に立つ者により説へられる所である。然し我等が彼等と立場を異にする事は上述の如くであつて、我等に於て問題となる點は百貨店の出張販賣が他の小賣形態の合理的に發揮すべき機能を侵蝕せりや否やの點にある。百貨店出張販賣問題は主として地方小賣店との關係に於て起つたものであるから今問題をこの點に主眼を置いて見るに、これに對し小賣店の機能は既に消滅せりと説く者がある。彼等の云ふ如く、若し小賣店が既に發揮すべき機能を失ひ多くの部面に於て百貨店により合理的に代置され得るなれば、小賣店保護策の如きは採るを得ず、出張販賣の如きも放任否寧ろ助長策を構ぜられねばならない。然らば今日小賣店の合理的に發揮すべき機能は既に消滅せりと見る事が出来るかどうか。小賣店の發揮すべき機能を消滅せりとなす論者は次の諸點を擧ぐ。(1)今日の小賣店の經營上に於ける非科學性非合理性は到底改良の餘地なく、屢々説へらるゝ協同動作によ

るそれも到底實現は期待出来ない。(2)小賣店の受持つべき唯一の分野とも見るべき日用品にありても、小賣店よりも遙に合理性を期待出来る消費組合の侵蝕があり到底存立の餘地はない。(3)小賣店の所得を勤勞所得とみ、勤勞所得としての社會的存在意義を要求し、その保護を主張する説も寧ろ或意味では資本所得とも見るべき分子の多い今日の小賣店の現状に於ては採るを得ない。更に(4)小賣店を社會の中堅として之が保護を要求するものもあるが、中産階級である事は必ずしも社會の中堅である事を意味するものでなく、第一に彼等が中堅たるの意思を有するや否やも疑問であり、第二に彼等の非道德性は我等の日常見る所である。

勿論以上は主として消費組合の小賣店機能侵蝕を辯護せんとする者の論する所であるが、今日小賣店の機能が既に消滅せりとせば百貨店の出張販賣も亦異なる視角より見られねばならぬ。而して百貨店又は消費組合により小賣店の全機能が十分代置し得らるゝなれば、我等の見地に於ても小賣店保護策の如き或は反百貨店運動反産運動の如きは當然否定されねばならない。勿論この説が私の所謂現實的機能に著目したものが本質的機能に著目したものは不明であるが、兎に角何れにせよ、私は小賣店の社會機能を全然消滅せりとする説には賛同出来ない。(1)今日の小賣店の經營改善も或程度不可能でないと思ふ。又論者の云ふ如く小賣店相互の競争意識の刺烈性を以て共同動作による大資本への對立を否定する見方も、(2)多くは自己の固定的顧客層を有する今日の小賣店にとつては必ずしも不可能ではなく、特に(3)彼等を一般的に脅やかす脅畏の前に手を携え

2) 本位田祥男氏 前掲論文二九頁

3) 拙稿、ゾンバルト教授の百貨店觀(經濟論叢昭和七年九月號)

W. Sombart, Das Warenhaus ein gebilde des Hochkapitalistischen Zeitalters
(Probleme des Warenhauses 77以下)

て當る事等は極めて可能性が多いと云はねばならぬ。小賣店組合の新設商店街の建設共同百貨店の設立自由連鎖店の結成等々はかゝる事實を實證して餘りあり、かく共同動作による經營の改善により或部面では他の小賣形態以上の機能を發揮する事も出來ると思ふ。(2)又強ひて百貨店消費組合等に小賣店の機能を代行せしめようとしても、元來これ等の發展には一定の限界があり、その間隙の發生は止むを得ない。(3)小賣店は資本家階級であると同時に勞働階級でもある。今日の小賣店の勞働は指揮勞働が主であり、彼等は結局資本家階級であるとする説は小賣店の開業の由來に鑑みるも支持し得られず、寧ろ私の如く、資本家階級であり同時に勤勞階級なりとするのがより妥當の様に思はれる。然る限り經濟活動の源泉として、階級闘争の緩和地帯として、極めて重要な意義を有するのである。(4)小賣店が社會の中堅なりとの意識を有するや否やは問題でなく、問題は寧ろ今日小賣店が然る働をなしてゐるか否かの點にあり、(5)小賣店を以て不道德的な存在とする事も亦賛成出來ない。否寧ろ今日の小賣店は河津博士も指摘してゐる如く、資金の上にも時間の上にも餘裕のないだけにその生活は道德の規範を逸する事なく、思想的にも亦健實であると云ふ事が出來よう。

以上我等は小賣店機能を消滅せりとなす説を反駁する事により、その説の支持し得られざる事を明かにした。勿論小賣店の機能が種々の原因で阻害され壓迫される事は認めねばならぬ。然しそれは決して小賣店の機能が消滅せる事を物語るものではない。私を以てせば、屢々のべた如く

- 4) 拙稿 出張販賣より見たる百貨店對小賣店の抗爭(經濟論叢昭和八年十月號)
 拙稿 百貨店の出張販賣に對する地方の反響
 5) 谷口吉彦氏 小賣商業の分業と競争(經濟論叢昭和八年十一月號)
 6) 河津暹著 中小農工商問題一四頁
 7) 河津暹著 前掲一五頁

各種小賣形態は夫々自己の最合理的な配給領域を持つものであり、小賣店の機能を消滅せりとなす説も採るを得ないと共に、例令消滅せりとするも、之を以て一方的に百貨店なり消費組合なりが之に代置するべきものでもないと思ふ。さて小賣店の機能が未だ消滅せざる事以上の如しとして、次に然らば、(イ)小賣店の機能は今日如何なる方面に存するや、(ロ)百貨店出張販賣は小賣店の機能を侵しつゝあるか又侵すべきものなりや否やの問題が當然起らねばならない。(イ)の問題は曾て私も研究した所であり(拙稿・百貨店と専門店(經濟論叢昭和八年八月號)参照)以下の論述の中にも自ら明かにされる所であつて、こゝでは積極的説明を略する事とし(ロ)の問題は本論の百貨店出張販賣の本質的機能を明かにした點で一應のべて置いた所である。こゝでは各種配給形態は夫々社會機能を有し未だ何れの機能も消滅せるものにあらざる事を明かにし、従つて之を放任して、百貨店に より小賣店の機能までも壓迫されつゝある現状を拱手傍觀するを得ない所以を明かにした。

B、全廢論 百貨店出張販賣を全く禁止すべしとの議論は二つの根據からなされて居る。一は地方に於ける商品の配給は定住的地方小賣店により十分合理的に行はれ得べしとする商業政策的見地、二は小賣店の没落地方經濟の窮乏の及ぼす社會的影響を憂へて之を救濟せんとする社會政策的見地に立つものより。社會政策的見地より之を主張する、河津博士は次の如く述べて居られる。¹⁾『大都會に於ける百貨店若しくは購買組合が大規模經營による利便を以て交通機關の發達に乗じてその爪牙を小都會に延ばす曉には辛うじて存続する小賣商人は之に對抗する事が出來難い

1) 河津暹氏 中小商工業者問題について(經濟學論集昭和七年十月號)

から其の力の弱きものから倒れざるを得まいが、國家としては之を傍觀默視する事を得ないから大規模經營の小都會進出を阻止する方策を講ずるであらうし、その方策を講ずる事が社會政策上必要のことであらう』『地方に出張販賣をなしその地方の小賣商店を迫害するが如きも之を禁じなければならぬ。地方の小都會の小賣商店の如きは其地方の微弱なる購買力を目的として經營するものであるから、大都會の百貨店が之に挑戦する如きは不當の競争と云はなければならぬ』と。私は右の所説には必ずしも賛同する事は出来ない。博士の所説は之を要約すれば小賣店の力は微弱なるが故に強きものゝ壓迫に耐え得ざるものである。故に國家の力によりこれを援助する意味に於て出張販賣を禁止すべしと云ふにある。然しこゝに於ては何故援助すべきやの根據は明かにされて居ない。小賣店の微力にして對抗し得ないと云ふ事は何等小賣店援助百貨店抑壓の根據とはなり得ない。我等の見地に於ては問題は小賣店が果して社會的に合理的機能を發揮しつゝあるや否やの點にある。

一 成程現實的に小賣店が地方の配給上に重要な地位を占めて居る事は疑ふ餘地なき所である。然しこれが果してあらゆる部門に亘つて然りやと云へば決してそうではない。今吳服類その他一般季節品の例をとる。これは例令出張販賣なくとも業務の繁閑に悩む所である。蓋し勞働力・販賣場所・投下資本よりなる小賣商業の經營係數 (Betriebskoeffizienten des Einzelhandels) の同格の維持が經營上の必須要件なりとせば、かゝる種類の専門店の如きは決して有利な地位にあるも

のではなく小賣分野の分業上から見ても専門店の受持つべき部門ではない寧ろ百貨店の如き平生業務繁閑調節機能を備へたものゝ出張により充實すべく置き代へらるゝは當然と云はねばならぬ。又これを消費者の側より見ても先にも述べた如く必要な時期に百貨店が來りて之を充實すべく何等の不自由も感ぜない。

現實的機能の本質的機能への接近が我等の對策の眼目なりとせば、現實的にその機能が營まれて居ると云ふ事だけでは放任の根據にも救済の根據にもなり得ない。問題は合理的に營まれて居るや否やにあるわけである。配給秩序の分業上それに本質的に屬すると考へらるゝ機能を營んで居るや否やの點にある。

二 社會政策論者の我等と立場を異にする事は先にも一言した所であるが、我等は出張販賣を全然禁止せざれば小賣店は没落するとも考へない。私の主張の如く或一定の制限のもとに之を許容するに於ては、小賣店の全面的没落は之を救ふ事が出來ると共に、寧ろ他面地方小賣店の刺戟劑となり、或は新經營法新販賣術の教授者となり、地方小賣店の更生地方文化の向上を助ける結果ともなるのである。³⁾ 我等は非合理的な小賣店を救ふために多數の合理的なものゝ更新發展の契機を失はしむる如きは國家の政策としては嚴に慎しまねばならない事を知る。(未完)

3) 拙稿 百貨店の出張販賣と中小小賣店の問題(經營研究昭和九年二月號)
拙稿 百貨店の出張販賣に對する地方の反響(經營經濟研究昭和九年六月號)